

Rihoの ドイツ便り

No.56

どうなる、原発

ドイツでも日本の地震と福島原子力発電所について、さかんに報道されている。ドイツ人は、牛乳が飲めなくなり、野菜が食べられなくなった25年前のチェルノブイリ事故をよく覚えている。国営テレビZDFによると、現在も南ドイツのキノコやイノシシは放射能で汚染されており、朝市で検査するとひっかかるという。

ドイツでは2000年の前政権（社会民主党と緑の党）の時に2021年までに原発から脱却することを決めたが、現政権（キリスト教民主同盟と自由民主党）が昨秋、稼働期間延長を決めた。国内で稼働中の17基を平均12年延ばす案に、野党は大反対したが通ってしまった。しかし今回の事故により、アンゲラ・メルケル首相（キリスト教民主同盟）は原発稼働延長の3ヶ月間の中断を14日発表し、全基点検を発表。15日には旧型の7基を停止を決めた。国営放送ZDFによると7基の発電量は国内の5.4%にあたるが、もともと余っていたため供給に問題はない。政府はしかし脱原発を決めたわけではなく、この3ヶ月の間に州議会選挙が4つもあるため、ただのポーズだと野党は批判している。停めても影響ないのなら、なぜもっと早く止めなかったのかと。

原発についてはドイツが世界で一番過敏に反応しているようだ。ドイツのテレビ局は東京ではなく大阪から中継し、ルフトハンザは東京就航を取りやめた。14日のデモに全国450ヶ所で11万人が参加し、21日には600ヶ所でデモが行なわれ、ハノーファーだけで1万人を集めた。ドイツは電気自由化により、どこの電力からでも電気は買えるのだが、再生可能エネルギーに乗り換える人が急増したという。

原発震災に襲われた日本人たちが、パニックになることもなく、暴動や略奪なども起きずにみな冷静に対応していることに賛嘆の声がある一方、「どうしてまだみんな日本にいるんだ。危ないとわかっていてどうして逃げないのか」とドイツ人によく聞かれる。「政府が大丈夫というのを全面的に信じているのか」と。原発事故は決してひとつごとではない、とみな胸を痛めている。

田口理穂 ごみかんドイツ特派員



Atomkraft Abschalten
「脱原発」と書いた横断幕を掲げた
ハノーファーのデモ



エッセイ

- * 3歳半の明は、10日間ほどパパとギリシアの実家へ。ドイツ人のおばあちゃんにはドイツ語、ギリシア人のおじいちゃんにはギリシア語で話し、「これは日本語でなんというの」と聞くと、きちんと答えていたとか。ギリシアは子どもに親切なので、あちこちで甘やかされてきました。
- * キリスト教では復活祭を前に40日間断食をするのが一般的。明の保育園では今年は「市販のおもちゃ」断ちをしています。ミニカーや台所セットは片付けられ、ダンボールや洗濯バサミ、布が遊び道具に。工夫しながら創造力が養われそうで、なかなかよいアイデアです。
- * 日本の原発問題はドイツでも連日放送されており、明は「フクシマ」と連発するようになりました。こんな形で日本の地名を覚えることになるなんて残念です。